

### ○子どもたちの変化

- ・やる気をなくしたりへこたれそうになったりした時「少々のことではへこたれません！だね」と自分で意識し始めた。
- ・卑怯なことはいけない……ということとはよく意識できている。
- ・子どもたち同士でアドバイスし合う時に、「丁寧さを身につけるって月田っ子宣言に書いてあるが！」と月田っ子宣言を使っている。納得して相手の子も聞いている。
- ・特に「少々のことではへこたれません！」は、よく口にし合って励まし合いながら活動している。
- ・子どもが少しへこたれているときに「少々のことではへこたれません」と言うとき少し回復することがある。授業中に何かあった時“あきらめません”とか“ていねいに”等月田っ子宣言を指しているとき、素直に「はい」と返事をしています。細々とした注意ではなく、月田っ子宣言を示すことで自分のいけないところに自分でも気付けるようになってきた気がします。

### ○先生方の変化

- ・学校で共通して指導できるのが有り難い。
- ・ぶれることがなく、子どもたちも文句を言わず納得してくれる。

・「夢に向かって努力し、少々のことではへこたれません」は、自分の中でも復唱することがある。

・学校生活の中で月田っ子宣言について話をする場面が多く、指導の締め言葉として唱えることが出来るようになった。

・指針があるので指導しやすい。軸を持って指導できると感じている。

以上のように、予想通り、先生方の指導の軸となってきているようです。また、ささやかではありますが、昨年度までとは違う子どもたちの変化が今後も楽しみであります。

### 人は何のために勉強するのか

↳「敬天愛人」を校訓として策定する前に語ったこと

七夕の日、月田幽蘭大学開校式にお招きいただき、ご挨拶をさせていただきました。

月田小学校長は、月田公民館の館長兼務です。老人クラブの活動は、公民館の重要な事業の一つです。故に、毎年お招きをいただいています。私は、このように地域の方々にお会いし、直接お話をさせていただくことは、とても有り難いことだと思っております。日頃のお礼は元より、校長としての想いや考えを地域の方々直接向伝えできるチャンスは滅多にないからです。

さて、その月田幽蘭大学開校式で、次のようなことをお話させていただきました。

挨拶の本論に入る前、唐突に「月田小学校を卒業された方はいますか？」と聞きました。約七割の方が、勢いよく手を挙げられました。その方に続けて聞きました。

「月田小学校には、その昔、木造の講堂がありましたね。（フムフムと頷く皆さん）講堂に入って正面、正面に向かって左上に有名な書が一つ掛かっていました。覚えていらっしゃる方いますか？」と聞きますと、手の挙げたのはただ一人でした。小学生の頃です。難しい書などに興味を示す子どもはいません。当然の反応です。

ここで、その書のコピーをカバンから取り出して次のように語りました。

敬天愛人……『天を敬い人を愛する』と読みます。西郷隆盛の言葉です。その証拠は、南洲という雅号です。ひよっとしたら本物かも知れません。鑑定団に出してもいいと思います」

続けて、敬天愛人の意味について語りました。

「天はみんな同じように愛します。だから、自分が自分を愛するのと同じように、人を愛する。人を大事にする。人を笑顔にする。そのためにこそ勉強するのだという教えです。簡単に言えば、世のため人のために勉強しなさいという教えです。

この書が、戦前から戦後七十年を経て、今なお、月田小の職員室に掲げられているのです。このような書が掲げられている学校を、私は聞いたことも見たこともありません。凄いことだと私は思います。

ですから、私は、この「敬天愛人」の教えを広めたいと思うのです。月田小の校訓にしても

いいぐらいに思っています。以前、このような想いを大門坂に書きました。すると、有り難いことに、保護者の中には、共鳴して下さる方も出てきました。五月の運動会では、敬天愛人の文字が入った親子・職員お揃いのTシャツまで作られました。

今の親は、子どもたちに言います。

「勉強は、あなたのためにするんですよ。将来困らないようにするために……。今、勉強してないとあなたが、損するのよ」



このようなことを日本中の親が、口を揃えて言う時代です。皆さん、果たしてこれでいいのでしょうか。自分のことだけを考える若者ばかりの日本になってもいいのでしょうか。

当然、勉強は自分の為ではありませんが、その勉強は、世の中に役に立つ、人を幸せにする。そのために勉強するんだよと子どもたちに語ってやるべきではないのでしょうか。

皆さんに願います。お孫さんがおられたら、あるいは、近所に子どもがいたら、「敬天愛人」の思想を語ってやってください。

ちなみに、ちょうど二年前、青色発光ダイオードの発明でノーベル物理学賞をとられた赤崎勇博士は、鹿児島県大龍小学校の出身です。その大龍小学校の校訓は、『敬天愛人』です。

以上のような話をさせていただきました。

いかなる場においても「教えて褒める」ことを基本方針とする！

早いもので一学期も終わろうとしています。さて、私が、本校の職員に常々お願いしていることがあります。

それは、「いかなる場においても、『教えて褒める』ことを貫く」という一点です。学習の場面でも、掃除の場面でも、トラブルが起きたときでさえ……この方針はふれません。このことは、月田奨学会の総会においても、保護者の皆様にお約束したことであります。本校の玄関前に掲げたグランドデザインにも、明記しております。(学校においでの際には、ご覧ください)

日本の伝統的な子育てとは……

日本の歴史は古く、二千年以上の歴史があります。そこには、幾百、幾千年経て、作られ、育てられてきた日本の伝統的な教育方法がありました。

しかし、案外、日本人には、その伝統的な教育方法が分からないものです。

なぜなら親から子へ、子から孫へと伝えられてきた当たり前の方法だったからです。当たり前だから文章で残すということがなかったと考えたらいいでしょう。

ところで、明治維新前後、多くの西洋人が日本を訪れました。彼ら西洋人たちが驚きの目で書き残したものがあります。それは「日本人の子育て」でした。西洋人の子育てとの違いに目を見張り、感動して記したのです。

例えば、大森貝塚を発見し、東大教授になったアメリカの動物学者・モースは、日本の子育ての素晴らしさを次のように記しています。

「世界中で日本ほど、子どもが親切に取り扱われ、そして子どものために深い注意がはらわれる国はない。(中略)日本人の母親ほど辛抱強く愛情に富み、子どもにつくす親はいない。刑罰もなく、とがめられることもなく、うるさくぐずぐずいわれることもない」

英国公使クロフォード・フレイザー夫人は、次のように述べています。

「日本の子どもが、怒鳴られたり、罰を受けたり、くどくど小言を聞かされたりせずとも、好ましい態度を身につけてゆくのは、見ていてほんとうに気持ちのよいものです。彼らにそがれる愛情は、ただただ温かさと平和で彼らを包み込み、その性格の悪いところを抑え、あらゆる良いところを伸ばすように思われます」

もう一人だけ紹介しましょう。

英国の女性紀行作家イザベラ・バード(一八七八年来日、彼女は自らの見聞や印象を故国の妹に書き送った)

「私は、日本の子どもたちがとても好きだ。私はこれまで赤ん坊が泣くのを聞いたことがない。

子どもがやっかいをかけたたり、言うことをきかなかったりするのを見たことがない。英国の母親がおどしたりすかししたりして、子どもをいやいや服従させる技術やおどしかたは知られていないようだ」

当時、西洋では、「ムチで叱る」教育が行われていました。

日本の親は、怒鳴って子育てしていませんでした。日本の親は、叱って子育てをしてはいませんでした。これが日本の伝統的な子育てだったのです。

いつから大きく変わってきたのでしょうか。

私が思うに、戦後、日本へ入ってきた西洋の影響が大きいのではないのでしょうか。「抱きぐせをつけない」などと全く日本の子育てとは正反対の西洋の育児書の影響は見逃せないと思います。

親から子へ、子から孫へと伝わってきた日本の伝統的な子育ては、端的にいうならば……「ていねいに教えて、褒める」です。だからこそ、日本人は昔から礼儀正しいのです。

しかし、最近、我が子を虐待してしまおうというとても悲しいニュースが日々飛び込んでまいります。その度に、心の中で、「日本の伝統的な子育ての復活を！」と叫びたくなるのです。

我が子に対する関わりの参考にしてみてください。

(※師である向山洋一氏から学んだことをもとに記したものです)

### 第三章 眠育の推進